

だすのもり)を進んでいる最中や、市中で古い建築物などが残る風情ある一角を通り抜ける時は、平安時代

にタイムスリップしたのではないかと見たがうくらいで、深く印象に残っています。

京都に根付く王朝文化

◆五島 宮廷文化というと私たちにとっては遠いもののように思いますが。伝統文化とか京都文化といわれるものともまた違ったイメージがあります。

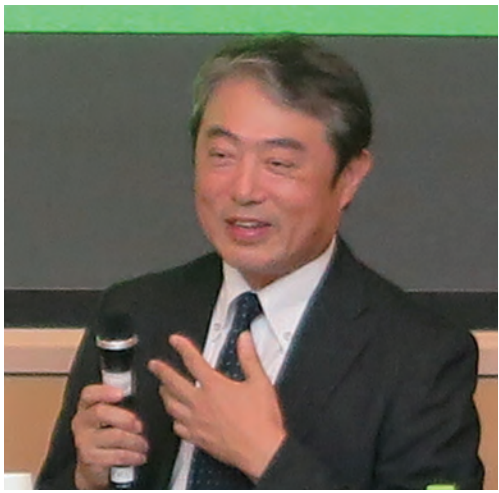
日本文化の中で宮廷文化といわれるものがどんな位置にあるのか、その考えるきっかけとして三月三日桃の節句の、ひな人形について考えてみたいと思います。内裏雛(だいらびな)といわれるように、ひな人形は天皇・皇后とのお住まいである皇居(内裏)のようすを模したものです。現代のようなひな人形は、江戸時代に広く一般に広まったとされ

ますが、当時の人にとっては天皇や皇居といったものはやはり憧れだったでしょう。

現代の五段飾りといった立派なひな飾りは、男びな・女びなという一対の人形に、お仕えする女性である三人官女、能のおはやしを奏でる5人の樂人を表した五人ばやし、左近衛府・右近衛府(左近の桜・右近の橘はここからきています)と呼ばれる兵団の長官である左右大将などでよく演奏されています。宮中の儀式などで、能の樂隊がひな人形に加わっているのは不思議に思われるかもしれ



ません。実は室町時代、3月の左近の桜の咲く季節に、天皇は皇子や皇女、そのなかには他家に嫁いだり、出家して門跡寺院に入った人たちもおられますが、そうしたお子達を御所に集めて、宴を催し、能をご覧に



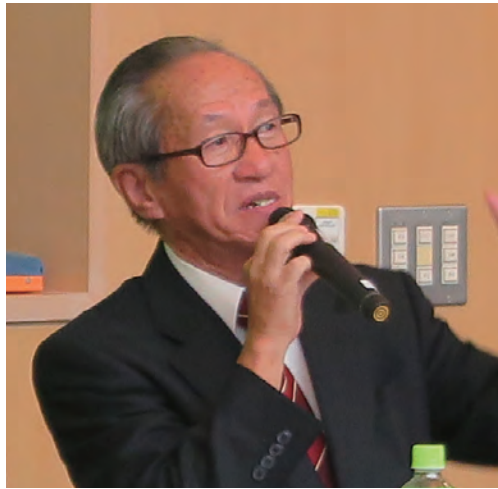
なっていたのです。公式行事ではないのですが、宮中の遊びとして江戸時代までつづきました。

ここで演じるのはプロの能樂師ではなく、京都の都市民(町衆)の中で能樂に熟達した人が選ばれます。当時、京都では能を舞ったり謡を謡ったりすることが流行して、それが一つの町衆の教養でもあったのです。これを手猿樂といえます。そうした彼らを選んで能を舞わせるので



ですが、反対に町衆の中では内裏で能を舞うことが一種のステータスにもなるのです。京都の町衆文化と宮廷の関係性を考えるとき、こうした事実は大きなヒントになるのではないかと思います。

現在の京都御所は平安時代の内裏と同じ場所ではありません。西暦960年にはじめて燃えてから内裏は里内裏として場所を転々とし、南北朝時代に現在の場所に定着しました。その当時の御所はかなり荒廃していました。ふつうの住宅をそのまま内裏として用いたりしました。この頃、諸国の戦国大名は、天下を狙って上洛を目指そうとしますが、同時に京都文化を積極的に吸収しています。たとえば国宝の狩野永徳が描いたとされる「洛中洛外図屏風」は織田信長から上杉謙信に贈られたといわれています。これも、京都への強い関心を示すものの一つです。そのいっぽうで織田信長は、御所の再建にも積極的に取り組んでいます。戦国大名が内裏の再興に力を入れるのは、宮廷文化が京都文化の基盤をなすと考えていたからでしょう。



後、宮司さんやご住職さんから観光客向けとは違ったお話を伺えるのが楽しみです。そのような活動を続けていきます。さらに京都御苑のガイドツアーを毎週日曜日に開催しています。京都御苑内の閑院宮邸跡前に午前10時に来ていただければ、無料でご案内をさせていただきます。

京都御苑は国が管理する国民公園です。自然豊かで、樹木は約5万本あり、80種類ぐらいの野鳥が確認されています。

京都御苑を歩いていても、今日のテーマである宮廷文化に関する何かを目にするということは少ないのですが、ここは南北朝時代に現在の御所が移ってきて、歴史的な出来事が繰り返された場所ですから、当時の様子や古人の営みに思いを巡らせ、楽しみながらガイドをさせてもらっています。

先ほどからお話に出ている展覧会「近世京都の宮廷文化」にも、受付や監視員のボランティアとして都草の会員が関わっており、私も週2、

3回会場に行っておりました。会場の一つの城南宮には、大正天皇の即位礼の会場を再現した10分の1の模型を展示。紫宸殿や、その裏側には高御座もあり、非常に精巧な模型です。もう一方の会場である京セラ美



文化とは、単独の文化の分野で成り立っているわけではありません。時代の変遷とともに積み重なって重層的な構造をしています。そのなかであきらかに基調となっている文化があります。代表的なのは王朝の和歌

◆坂本 NPO法人「京都観光文化を考える会・都草」は、京都大好き人間の集まりです。現在は380人ほどの会員がおり、そのうち約100人は京都在住者以外の会員です。京都を学問的に探求しようという基本姿勢はありますが、それだけでは

なく、京都に深く入り込んで、体感、体験することも重要だと考えて活動しています。

祇園祭には150人ほどのボランティアを派遣してお手伝いをし、毎月30人くらいで神社や寺院での清掃作業もしています。作業が終わった



文学です。「源氏物語」もその中に入ります。そのあとでは能楽があります。茶道もそうでしょう。京都の文化というのは、そうした和歌文学を基調としてその上に能や茶道を積み重ねてこれらを核にしたものです。町衆たちはそうした文化を吸収して、さまざまな意匠を作り、次々に新しい作品を創り出してきたのです。宮廷文化もあきらかにそうした基調文化の一つです。

京都三大祭の一つ、祇園祭の山鉾は、建築や染織、工芸などの総合文化です。これ自体は宮廷文化ではありませんが、こうした工芸品を作った職人は十分に先にお話ししたような古典的な基調文化を踏まえていたとみるべきでしょう。

宮廷文化はそんなふうに関東の都市の人々にも根付いており、それが京都の文化のブランドを作ってきたのだと思います。

悠久の歴史に感動